

PHAYAOLレポート 2009-01 (参加者からのレポート)

～エコツアーに参加して～

シャンティ山口 現地訪問レポート

山口大学医学部 2年 白石健太

今回の訪問は自分にとって、とても興味深いものであった。

日本では関わることのできないモン族と関われるということで、言葉の面での多少の不安もあったが、貴重な体験ができると思った。

現地では、エコトイレの見学をした。今までこのようなものの実際を見たことがなかったため、その利用・活用のされ方に大変驚いた。人間の排泄物がガスとして、農作物の養分として、綺麗な水として利用されていて、循環型のシステムをなしていた。エコトイレは微生物の繁殖力などから東南アジアが適しているとのことであったが、世界的に、特に、アフリカなどの地域にも広めて、限りある資源での循環型社会や病気の回避などを行えたらいいのではないかと感じた。

実際にモン族が住むサンティスク村にホームステイした。そこで感じることはたくさんあった。

この村は供給が追いつかず夜は電気がつかないし、日本のように高い建物があるわけでもないため、星が綺麗で、空一面に降ってきそうな星が広がっていた。この村では山に囲まれて、自然の良さや大切さを何度も感じた。

また、学生たちはとても勉強に対して一生懸命で、就寝するまで勉強していた。そのような姿に、日本での自分の姿勢を見直さなければと思った。

そして、彼らの村で最も強く感じたのが、地域のつながりだ。子どもたちが村の地図を描いていた。それは完全に村全体を把握した地図で、200近い家の場所が再現されていた。この村では気軽に友人の家にご飯を食べに行ったり、遊びに行ったりと地域内での繋がりを感じることは多々あった。日本では同じアパートの人ですら知らないため、彼らのつながりが羨ましかった。また、モン族の民族衣装も着させてもらった。たった、3日間のホームステイであったが、モン族に近づき、モン族のことを少し知れた。

シャンティ学生寮では、学生たちは学校から帰ってきたら農作業をし、また、自主学習もこなし、スポーツもしていた。彼らは今を一生懸命に生きていて、なおかつ、将来に対しても熱い思いをもっていて、バイタリティを感じ、見ているこちら側も彼らから見習えることがたくさんあった。彼らはシャンティ学生寮に通うことでより一層の感謝の気持ちをもっているのではないかと感じた。そして、そのような彼らを支えるのがシャンティのスタッフで、スタッフに寮の卒業生がいることは、学生が身近に関われる要素なのではないかと思った。

今回の訪問で、日本では感じられないことを多く感じられ、また、山岳少数民族の実際や現状を目の当たりにすることができた。この貴重な経験をまずは日本で活かして、この現状や暮らしを周りの人に伝えていくなど、何か行動に移していきたい。



加藤菜実

白石健太



2009年8月24日から8月29日までの6日間、タイの山岳少数民族を支援しているシャンティ山口の活動や現地の現状を見るために、北タイ・パヤオ県にあるシャンティ寮、エコトイレが設置されてある農村、サンティスク村を訪問することができた。

初日と最終日は農村のエコトイレを見学することで、エコトイレの有効性を確認し、タイの農村部での衛生状況の改善の必要性を感じた。エコトイレから作り出されるバイオ燃料は環境に大きな影響を与えずに済み、タイ政府からの森林伐採の制約からの影響も受けることがないなどの利点がある。エコトイレが設置してある保育園の調理室では、バイオ燃料が有効的に使用されており、保育園の自慢の一つにもなっていたように感じた。調理室のガスを実際に見せてもらったとき、それが排泄物から作り出されているものだという事に感動した。また衛生面においては、園児に手洗いや歯磨きなどの衛生指導をすることができており、衛生面における意識の向上が期待されることを確信した反面、日本では当たり前に行われてある衛生教育がやっとならざるを得るようになってきているという状況を目の当たりにして、貧富の差が作り出す知識や教育の差について考えさせられるものであったと感じている。

子どもたちのあどけない笑顔を見ていると、どこの地域においてもこのような笑顔が溢れていてほしいと思うとともに、そのためには農村部での徹底した衛生環境の改善を進めていくことが大切な活動の一つになると思った。

シャンティ寮生の生活は、私にとって衝撃的でかなり刺激を受けるものであった。早朝からの朝食作りに始まり、学校から帰ってきたら休む間もなく一人一人が割り当てられた仕事、つまり農作業や家畜の世話などを一生懸命にやり、夜は遅くまで勉学に励む姿は、私が見習うべきものであった。さらに学生たちはそんな生活の中の大部分を楽しみや嬉しさといったポジティブな感情として捉えており、シャンティ寮での生活の一瞬一瞬を喜びや楽しさに変えていたように感じられた。また将来の自分を想像し、生き生きとした眼をしていたことが印象的だった。

サンティスク村では3泊4日のホームステイをさせてもらった。全く文化も言葉も違う土地で、初めて会う家族に温かく迎えてもらい始まった4日間だった。すべてのことが新鮮で面白く感じられると同時に、久しぶりにかなりゆったりとした時間をのどかな風景の中で過ごすことができ、心が豊かになっていくように感じた。サンティスク村の人々はとても仲が良く楽しそうで、お互いに協力している姿は、相手のことを信じて思いやり、大切にするという気持ちが根底にあるのだろうと感じた。私自身もサンティスク村の人々のように、相手を思いやる気持ち、大切にすることをもち、たくさんのことを楽しめるような人になりたいと思った。

今回、6日間という短い期間での訪問だったが、たくさんのことを学び、感じ、そして新しい家族や友人もでき、素晴らしいものを得たように思う。今の社会の中で私たちがどう生きていくか、ということを考えたとき、私は自分の周りのこと、日本という枠組みだけを考えて生きていくのではなく、社会的に弱い立場の人、環境や条件があまり良くない人たちの立場も考えることができ、そして少しでもそういう人たちと協力し合いながら生きていけるようになりたいと思った。それは、必ずしも貧しい人たちを助けるというだけではなく、お互いにそれぞれ得られるものがあるのではないかと思う。

今回はその第一歩として、現地に足を踏み入れられたことをうれしく思っている。



村長さん・ホストファミリーとのお別れ“また帰ってきてネ”



サンティスク村

—環境衛生活動募金にご協力をお願いします。—

2009.9.30saeki